

荒野に 呼ぶ声

恨と抵抗に生きる
韓国詩人群像

金学鉉著

柘植書房

荒野に
呼ぶ声

恨と抵抗に生きる
韓国詩人群像

金学鉉著

柘植書房

著者略歴

金 学 鉉 (キム・ハクヒョン)

一九二九年韓国原州生まれ。ソウル大学中退、日本中央大学大学院博士課程修了(西洋哲学専攻)。現在、早稲田大学語学教育研究所他非常勤講師。
編訳書…ジョン・C・H・ウ『東西の彼岸』(中央出版社)、金成植『抗日韓国学生運動史』(高麗書林)、宋敏鎬『朝鮮の抵抗文学』『韓国四月革命』(拓植書房)、咸錫憲『苦難の韓国民衆史』(新教出版社)

荒野に呼ぶ声

―恨と抵抗に生きる韓国詩人群像

一九八〇年十一月二十五日 第一版第一刷発行

定価 一三〇〇円

著 者 金 学 鉉

装 丁 鈴木 堯

発行所 株式会社拓植書房

東京都千代田区神田神保町一四六―二
電話〇三(二九一)〇九九一
振替東京三十四三二八七

印刷所 有限会社西田整版所

製本所 株式会社美成社

死ぬ日まで天を仰ぎ

一点の恥ずべきことなきを

草葉に立つ風にも

わたしは心苦しんだ

星をうたう心もて

すべての死に行くものを愛さねば

そして わたしに与えられた道を

歩まねば

今宵も 星は風に触れて泣いている

尹東柱 《序詩》（一九四一年）

荒野に呼ぶ声

目次

《序詩》

1

I 「恨」と抵抗に生きる

——申采浩の思想

7

II 詩と衆生と祖国

——韓龍雲のこと

26

III 「ニムの沈黙」の時代

——韓龍雲とニム

39

IV 「奪われし野」の一篇の詩

——李相和と一九二〇年代

58

V 哀しき詩人・金素月

——二〇年代の民族抒情詩人

78

VI 『国境の夜』の悲哀

——「三・一」以後の文学に思う

101

VII 一九三〇年代のヴ・ナロード運動

——沈熏と「常緑樹」

114

VIII 曠野の詩人・李陸史

——朝鮮文学と魯迅

136

IX 空・風・星の詩人

——尹東柱の詩心とその生涯

163

X 金洙暎の詩の世界

——運命と使命の谷間で

188

XI 四月の詩人・申東曄

212

——六〇年代「精神界の戦士」

XII 光は獄中から・金芝河の思想

236

XIII 〈光り輝く時〉を求めて

258

——全羅道の詩人たち

あとがき

297

参考文献

300

I 「恨」と抵抗に生きる——申采浩の思想

(1)

「恨」と「抵抗」の織りなす歴史がわれわれの生きる歴史である、と言ってもそれは言い過ぎではないように思える。なぜわれわれは苦難の歴史を生きなければならないのか。なぜ、われわれはごくあたりまえの、自律的な生にあずかることができず、つねに他人のいけにえにならねばならないのか。「大国」の利益のために国土は分断され、東西対立の最前線に身をさらし、自らの運命を自らの手で創造しえず、波間に漂う一葉の小舟のように、時代の激流に押し流される。民族の統一という荷が重すぎるのだろうか。でなければ運命の女神の意のまま「諦念」のなかへ我をすっかり忘却させてしまったのだろうか。一九四五年の解放以来今日まで「過渡期」のなかでわれわれは生きてきた。「過渡期」だから「仕方がない」「明日のためにがまんしよう」、北においても南においてもこの言葉が、いかに威力を発揮してきたことか。今もそれは変わらない。そして、一方では今日の苦難・不幸が外部勢力い

わゆる「外勢」に因る、という觀念が固定してしまった。近代化の過程において徹底した「我」の自覚が行なわれる余裕もなく、時代の移り変わりにただ身を任せ、そのつど異なる思想にとびついた。はたしてわれわれは独自の思想を創造したことがあったのか。あるとすればそれは一体どのような思想なのか。近代だけでなく中世以来、外部思想の「輸入超過」であえぎ、内なるものの芽生えはこの地では許されず、あったとしてもすぐ断たれてしまった。それはまさに今日の韓国の「借款經濟」の發想に共通のものがある。「借款思想」の重圧の下で己れを見失ってしまった。

この地のすべての人が歡喜して止まなかった一九七二年の「七・四声明」も真夏の夜の夢であったのか。もしも声明どおりに実現されるとすれば人類の歴史に輝かしい一ページを飾る今世紀最大の出来事として称賛されつつけるであろう。イデオロギーを超越し信仰を超越して、あらゆる対立要素を克服して平和的・自主的に統一国家を再現するという、何とすばらしい「言葉」なのだろう。政治の「言葉」のみが、「叫び」「スローガン」のみがこの地を覆う。真理と虚偽の区別がつかなくなつてすでに久しい。言葉が真理の住家に住まう日はいつのことか。真理を語り愛を語るものは「赤」「反動」の烙印を押され、偽りの「言葉」のみがこの地を支配する。

だが、こうしたなかでいま「血まみれの真実とデッチ上げとの間で」壮絶な闘いが展開されている。時代を正しく証言しなければならぬ知識人の多くが、「暗闇の中に隠されている真実を光のもとに引き出すという仕事」に無関心になっているなかで、金芝河^{キムサハ}をはじめ数少ない知識人が死を賭して闘っている。「血まみれの真実とデッチ上げとの間でわれわれがいかに人間らしい決断をすべきなのか」を問題にする金芝河の意識のなかに、私はわれわれの歴史の重みを感じる。時代の転換期に、苛酷な生をうけ、暗黒の夜にあって、やがては訪れるであろう朝を待ちわびる詩をうたい獄中に死ん

でいった詩人李陸史、尹東柱をはじめ、韓龍雲、申采浩ら、「恨」を抱いて抵抗に生きた多くの先人たちの像がいま獄中にいる金芝河の姿と重なり合う。

金芝河が言う「人間らしい決断」、別の言葉で言えば「人間としての決断」は容易にくだせるものではないだろう。それはいままでの生を葬る、新たな「生の飛躍」であるからである。

いま新しい思想が育ちつつある。それは生の新たな飛躍を約束するであろう思想、歴史の尊い産物である。受難の歴史を背負い、闘いをくりひろげている韓国民主化闘争の過程において、この思想は光を放ちつつある。民主化のための闘いは独裁に対する抵抗にとどまるものではない。長い間の封建の鎖を断ち切る、朝鮮民族の意識革命への闘いである。「反独裁・民主回復運動」「反外勢・民族主体確立運動」「反特権・民生保障運動」という民主化運動の三大テーゼの底を流れる精神は「人間として」の生を生きたがための、虐げられた民衆の欲求である。三大テーゼの思想的背景は洪景来乱（一八一）といわれる民衆蜂起から東学農民戦争（一八九四）、抗日義兵闘争（一九〇五～一四）、三・一独立運動をはじめ国内外での抗日独立闘争（一九一〇～四五）、そして解放後の四月革命（一九六〇）という抵抗の歴史の大きなうねりのなかで求められよう。近代化というものが人間解放の意味を持つとすれば、血みどろの抵抗の歴史のなかでわれわれの近代化はなされてきている。

一八七六年の門戸開放（江華条約）以来、近代百年の歴史が「外勢」やそれらと手を結んだ一部特権階級に対する抵抗の歴史であったこと、そしていまなおそれが続けられているということ、この事実を抜きにしてはわれわれの現代史は語れない。この抵抗の歴史をつうじてわれわれは明日への新しい思想を獲得することができるということ、そして現在の民主化運動がその延長線にあるということ

苦難の百年を経て、われわれはようやくにしてわれわれ自身のたしかな思想、哲学を持つようとして
いる。輸入された借り物の思想でなく、「恨」の歴史のなかで、金芝河の言葉を借りるならば、韓国
の民衆が「これまで個人的自我と同時に、集団的自我のなかで、数知れぬ傷を受け、抑圧を受け、踏
みつけられてきた過去の哀しい歴史のなかで蓄積されてきた恨み」（李恢成訳『不帰』、中央公論社）
の爆発をつうじて創造される思想である。この思想は一個人あるいは特定の階級の思想ではない。集
団の思想である。あるすぐれた哲学者の思想でもない。民衆の、人間らしい生にあずかることができ
ず抑圧され、利用され、くずのように捨て去られてきた人々の、「人間として」生きるがための思想
である。金芝河をはじめ民主化闘争をしている人々は民衆の代理人として、この思想の実現に生命を
かけているのだ。しかしながら、この思想はいまだ血肉とはなっていない。われわれのものに成しう
るか否かはわれわれ自身にかかっている。民主化闘争の過程で一層研ぎ澄まされ、輝きをましてきて
いる思想、別の言葉でいえば民族の「恨」の炎が、真実「活ける火」となって明日の栄光をもたらす
かどうかは、ひとえに、われわれ自身の英知と行動にかかっている。

ところでこのような思想の淵源を探るとき、「恨」を克服し、抵抗に生きた先人たちの思想から見
出す作業もまた必要であろう。国運が傾きはじめた十九世紀末、日本帝国主義の侵略の過程で、多く
の憂国の士が国をあとに中国大陆（「北満」間島をふくめ）や露領ウラジオストックなどに亡命し、
愛国啓蒙思想の普及運動や抗日運動を進めるようになるが、丹齋・申采浩（丹齋は号）もそのうちの
一人であった。十九世紀末から二十世紀の初めにかけて、朝鮮が生んだ民族史家・啓蒙思想家・革命
家であった申采浩は、いわゆる開化期以来の激動の歴史を生きた代表的知識人として光芒を放ってい
る。

七〇年代に入って韓国では申采浩に関する研究が盛んになり、七二年には『丹齋・申采浩全集』（上・下巻）が刊行され、七五年にはさらに『丹齋申采浩全集・補遺』が刊行された。史学分野では勿論、哲学・文学の面でも申采浩の思想の研究・再評価が行なわれており、今後こうした動きはますます高まる傾向にある。

(2)

「風雲の起つが如く、洪水の駆けるが如く、雷震の鳴るが如く、潮の打ち寄せるが如く、火の燃え上がるが如く、二十世紀の帝国主義よ（領土と国土を拡張する主義）……この帝国主義に抵抗する方法は何か。曰く、民族主義（他民族の干渉を受けない主義）を奮揮すること、是なり」

これは、申采浩の小論「帝国主義と民族主義」と題して一九〇九年五月二十八日、当時唯一の民族紙『大韓毎日申報』に掲載されたものからの引用である。一九〇五年の乙巳条約（『保護条約』）、一九〇七年のヘーグ密使事件、これに続く高宗の讓位、「丁未七条約」（第三次韓日条約）、韓国軍隊の解散と目まぐるしく変転する激動期にあつて申采浩は『大韓毎日申報』の主筆として論陣を張った。

潮のように押し寄せる帝国主義、この帝国主義に立ち向かう唯一の方法を申采浩は民族主義に求めたのである。「要するに帝国主義は民族主義が薄弱な国にのみ侵入してくるもの」であるゆえ、「韓国同胞は民族主義を大奮発して（我族の国は我族が主張する）という一句をもって護身符をつくり、民族を保全すべきである」。この短い論説のなかにすでに申采浩の終生にわたる行動の指針、思想の核心が鮮明に浮かび上がっている。

申采浩は一八八〇年十一月七日、忠清南道の大徳郡政生面塩洞桃林里というところで生まれた。少年時代は忠清北道清原郡琅城面帰来里に移って過ごしたといわれ、現在この地には申采浩の墓とともに、萬海・韓龍雲が建立した墓碑がひっそりと立っている。年譜によれば、十八歳まで祖父の経営していた漢文私塾で学問を修め、十二、三歳までに四書三経を読破したという。一八九八年、十九歳の秋、儒学の殿堂成均館に入学、一九〇五年二月成均館博士になった。この年、乙巳条約が成立し、『皇城新聞』には民族の悲憤を代弁する張志淵^{チシユン}の有名な論説「是日也放声大哭」が発表されるが、このため同紙は強制停刊された。申采浩はこの頃論説委員として活躍したといわれるが、一九〇六年（二十七歳）に『大韓毎日申報』にうつり、主筆となって一九一〇年の「合邦」前までのおよそ四年間、民族主義の立場から排日の論説や愛国啓蒙思想の鼓吹に健筆をふるった。彼がいかに民族主体確立に精力を注いだかについては、その史論から十二分に汲みとれるが、ここでは史学関係以外の論稿をとおして、今日に生きる思想を垣間みることにしたい。国の危機的状況に直面した青年申采浩の目に映った現実ほまさに絶望的なものであった。

「ああ今日、我が大韓に何があるのか。国家は有るが国権は無い国であり、人民は有るが自由の無い国であり、貨幣は有るが鑄造権が無く、法律は有るが司法権は無い。森林は有るが我が所有で無く、鉉山は有るが我が所有で無い……」（『大韓の希望』一九〇八年『大韓協会報』）。

大教育家もなく、大新聞家もなく、大哲學家、大文學家、大理想家、大冒險家もない、「空空無存」の現実である。だが、たった一つのもの「希望」だけはある。申采浩は「希望」に国家再生の夢をか

ける。「希望というものは万有の主人である。華があるゆえに実が有り、根があるゆえに幹があるごとく、希望があれば事実必らず有るがゆえに」、現実に絶望せず歴史の新たな創造に向かって希望を持てと力説する。この時期、すなわち「合邦」直前における申采浩の論説は愛国の熱情にほとばしる民族主義者の面目躍如たるものがあつた。一九〇九年『大韓毎日申報』に発表された「与友人絶交書」は、親日団体である「一進会」に入会した友人に与える絶交の書であるが、時世に妥協していく知識人への激しい怒りがみえる。

「——真の親日者が真の排日者になれるという（『国民報』第五百八十七号論説）、蓋しその意味は外面では親日であるが、内面では排日だということだが、一度の親日で五条約が成立し、二度の親日で七条約が決まり、三度の親日で軍隊が解散され、四度の親日で韓国植民案が現われた。……四千年の歴史を戴く国が永久に亡び、二千万人がみな死んでのち……はじめていわゆるほんとうの排日をしようとするのか」

外勢に対する妥協論が高まり、一進会を中心とする親日派の群れが民族の心をむしばみつつある状況に対し、憤懣と同時に警戒の声を発したのである。一九一〇年四月、亡命の途につくまでのおよそ四年間における申采浩の言論活動は目ざましい。

* 一八七六年開港以来の朝鮮思想界の推移を千寛宇氏は、民族意識と、近代志向意識という二つの尺度で測り、つぎのように類別している。すなわち①民族という指標に重みがおかれ、近代志向という指標に冷淡な傾向（例、衛正斥邪系）、②民族と近代志向の二つの指標を複合的な一体として把握した傾向（例、開化自

強系の大部分)、③近代志向という指標に重みをおいて民族という指標をなおざりにした傾向(例、外勢依存にかたよった系列)であるが、近代ジャーナリズムは主に②、③の二つの系列において試みられ、推進されたのである(『愛国』一九七一年第三集、参照)。

申采浩の言論活動は②の開化自強系の立場に立つといえるが、どちらかといえば民族の主体確立に対する強烈な執念におおわれていた。それは彼の著述活動をみてもわかる。中国の思想家梁啓超原著の『伊太利建國三傑伝』の訳述発行をはじめ(一九〇六)、『大韓毎日申報』に「李舜臣実記」を連載(一九〇八)、『乙支文徳』(一九〇八)、『東国巨傑 崔都統伝』(一九〇九)を出版した。『伊太利建國三傑伝』は十九世紀のはじめ、分裂した国家を統一に導いたイタリアの愛国者マッチャーニ、ガルバルディ、ガヴールの三人の伝記であるが、その他は朝鮮の歴史上の救国の英雄三人の伝記である。このような一連の伝記物からみても、申采浩がいかに国の現状を憂い、将来に希望をかけていたかわかる。国を外部の侵略から守り、自主・独立の気風を国民に植えつけるにはどうすればよいのか……。「恨み歎く」だけの風潮に対して申采浩は歴代の、民族の誇りうる人物を提示し、人民大衆に訴える。ともかくにも自ら強くなければどうにもならない、帝国主義は民族主義の薄弱な国に侵入してくるものだ、「民族主義」を「護身符」として持つべきだ、と言うのである。

ところでここで注目されるのは、申采浩の思想における清末の「変法自強」思想の影響である。むしろ申采浩にかぎらずこの時代の多くの知識人に影響を与えているのだが、「清朝末期における敵復・康有為・梁啓超らの変法自強論はおもに韓末に張志淵によって輸入され、彼によって「自強主義」と大韓自強会の政治的实践にまで展開された」(申一徹「申采浩の自強論的国史像」)。特に梁啓超の文